

# 1 研究主題

## 積極的にコミュニケーションを図ろうとする子の育成

～ 小中一貫校の機能を生かした外国語教育を通して ～

# 2 研究の構造図

### 外国語活動の目標

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

### 学校教育目標

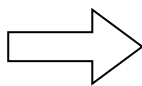
ふるさとを愛し、豊かな心を持ち、変化する社会の中で、自ら学び、たくましく生きる子どもの育成

- 自分で考え、進んで学習する子
- 思いやりがあり、協力して働く子
- 心身ともにたくましくねばり強い子

### 児童の実態

- ・明るく素直で、何事も一生懸命にとりくむことができる。
- ・自分で考えて行動することが苦手。
- ・自分の思いを表現したり、相手の思いを想像したりすることが苦手。

こんな子に  
育ててほしい



### 教師の願い

- ・受け身ではなく、自分で考えて行動できる子に。
- ・相手に伝わるよう自分の思いを表現したり、相手の思いを想像したりすることができる子に。

### めざす子ども像

「積極的にコミュニケーションを図ろうとする子」

### 研究主題

積極的にコミュニケーションを図ろうとする子の育成

～ 小中一貫校の機能を生かした外国語教育を通して ～

### 3 主題設定の理由

#### (1) 教育界の動向から

平成29年3月、文部科学省から新学習指導要領が告示された。今回の改訂では、「教育内容の主な改善事項」の1つとして、外国語教育の充実が挙げられている。今まで高学年で行われていた外国語活動が中学年で実施されるとともに、高学年では外国語が教科化されることとなった。

その理由として、「①急速なグローバル化に対応するために、今まで以上に、生涯にわたる様々な場面において外国語でのコミュニケーション能力が必要となること」、「②現行学習指導要領にもとづく指導を通して見えてきた課題を改善すること」の2点が挙げられている。特に②では、以下のような、「小・中間の接続の不十分さ」に関わる課題が指摘されている。

- 音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない。
- 国語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある。
- 高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められる。

それらを踏まえ、中学年から「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達段階に応じて段階的に文字を「読むこと」及び「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うことになった。

そして、このような外国語教育を通して、「子どもたちが卒業後も将来の進路や職業などと結び付けながら、主体的に学習に取り組む態度を身に付けられるよう、外国語（特に国際共通語としての英語）でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成していくこと」が求められている。

平成30年度の新学習指導要領の先行実施、ひいては平成32年度の全面実施を見据えると、よりよい指導法を探ったり、教材や指導体制等を整えたりしていくことは、喫緊の課題である。

ゆえに、外国語教育において、積極的にコミュニケーションを図ろうとする子を育成する授業のあり方を探っていくことは、教育界の動向とも合致していると言える。

#### (2) 本校の教育目標から

本校の教育目標は、「ふるさとを愛し、豊かな心をもち、変化する社会の中で、自ら学び、たくましく生きる子どもの育成」である。これを受けて、本校では「かしこく、なかよく、元気よく」を合言葉に、「自分で考え、進んで学習する子」、「思いやりがあり、協力して働く子」、「心身ともにたくましくねばり強い子」の育成をめざしている。

外国語教育において、積極的にコミュニケーションを図ろうとする子を育成する授業のあり方を研究していくことにより、合言葉に示された子ども像の具現化を図ることができると考えた。

また、外国語教育において培った「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」は、生活の中の様々な場面においても、活かされていくものと考えられる。そして、グローバル化の進展をはじめ大きく変化していく社会の中で、子どもたちがたくましく生きていくためにも、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」は、より一層必要となってくるものである。

このように、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」は、本校の教育目標である「ふるさとを愛し、豊かな心をもち、変化する社会の中で、自ら学び、たくましく生きる子どもの育成」に関与するものである。

### (3) 子どもの実態から

本校の子どもたちは、明るく素直で、何事にも一生懸命とりくむことができる。また、上級生が下級生の面倒をよく見ており、その姿は本校のよき伝統として引き継がれている。

一方で、自分の思いや考えを表現したり、相手の思いを想像したりすることには課題が残る。それらが上手くできずに、ケンカやトラブルを起こしてしまうことが見受けられる。また、言われたことや、やることが明確にわかっていることには一生懸命とりくむことができる半面、自分で考えて行動することは苦手としている。

このように、本校の子どもたちに見られる課題は、コミュニケーション上の課題であると言うことができる。

そこで、「コミュニケーションを図ろうとする態度を育成していくこと」が求められている外国語教育の面から研究を進めていくことで、子どもたちに見られる課題を改善することにつながるのではないかと考えた。

### (4) 小中一貫校化の視点から

本校は、本年度より、小中一貫校「房南学園」としてスタートした。小中9年間を見通した教育が推進されるよう、小中の円滑な接続をめざした指導のあり方を探っていく必要がある。

その際に大切になってくるのは、「小中一貫校のメリットを生かした連携を図っていくこと」である。小中一貫校のメリットとは、小学校と中学校の教員が共通理解を図り、同じ方向を向いて、ともに指導にあたることができる点だと考える。普段から、お互いの授業を見合ったり、子どもたちに関する情報を共有したり、授業でティーム・ティーチング（以下、T・T）をしたりすることができるのも、小中一貫校だからこそである。

そのような連携を図る上で効果的だと考えるのが、外国語教育における連携である。中学校の外国語の担当教諭が、小学校の授業でT・Tを行うことで、T1とT2のコミュニケーションを見せたり、子どもたちとコミュニケーションをとったりする等、その専門性を生かした指導を行うことが可能となる。それがコミュニケーションのモデルとなり、「外国語を使って、どのようにコミュニケーションをとったらいいのか」というイメージをもつことができると考える。そうすれば、子どもたちは、自分からコミュニケーションを図ろうとするようになるだろう。

本来であれば、ネイティブ・スピーカーであるALTが、全学年でT・Tをすることが望ましいだろう。しかし、現実的に、それは難しい状況にある。そこで、小中一貫校のメリットを生かして、中学校の外国語の担当教諭と連携を図ることで、全学年でT・Tをすることが可能になる。また、高学年において中学校の外国語の担当教諭がT・Tをすることは、「小中の円滑な接続」という面からも、効果が大きいと考える。

ゆえに本年度は、小中一貫校としてスタートしたことを機に、「小中一貫校のメリットを生かした連携を図っていくこと」に重点を置き、外国語教育の面から研究を進めていく。

以上の4つの視点にたち、本研究主題を設定した。

## 4 研究目標

- 積極的にコミュニケーションを図ろうとする子を育成するための外国語教育のあり方について、授業実践を通して明らかにする。

## 5 研究内容と方法

### 【理論研修】

- 講師を招聘し、指導を受ける。

講師：南房総教育事務所指導主事 庄司 義広 先生

### 【授業研修】

- 手立てや教材等について検討し、指導していく。

- ・房南中学校の外国語担当教諭や、ALTとの連携
- ・電子黒板の効果的な活用
- ・教材の作成および活用
- ・地域人材への協力依頼

- 講師を招聘して研究授業を行い、指導を受ける。

- ・授業研究会（授業練磨公開）

講師：南房総教育事務所指導主事 庄司 義広 先生

### 【年間指導計画の作成】

- 年間指導計画を作成し、検討していく。

- ・年間指導計画の作成
- ・授業実践による検証
- ・年間指導計画の修正

### 【外国語に慣れ親しませる活動】

- 外国語に慣れ親しませる活動を行う。

- ・高学年年間70時間・・・授業(35時間)＋朝のトレーニングタイム(3.5時間) ※短時間学習
- ・中学年年間20時間・・・授業(20時間) ※短時間学習
- ・低学年年間10時間・・・授業(10時間) ※短時間学習

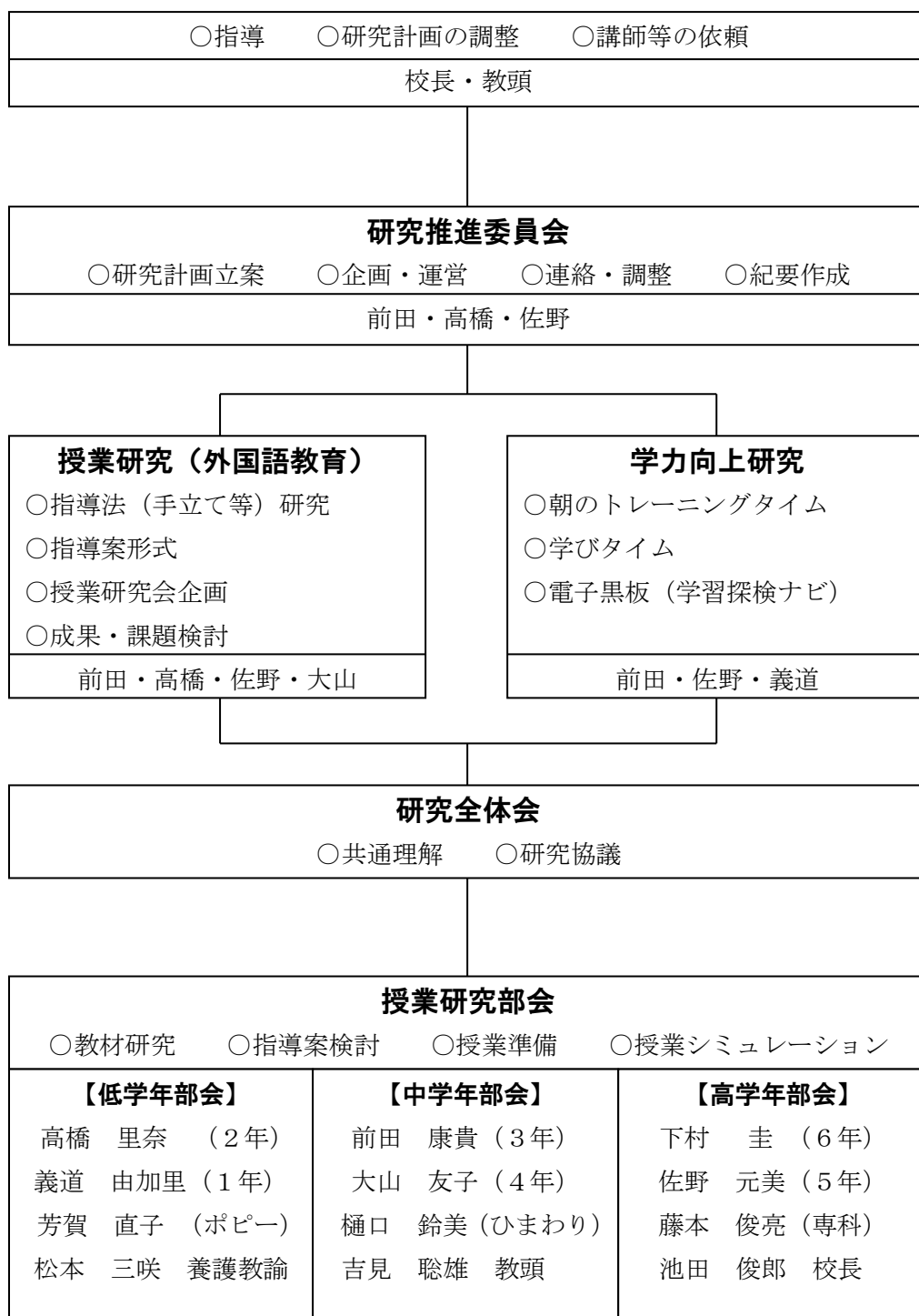
## 6 めざす子ども像

「積極的にコミュニケーションを図ろうとする子」

今年度は、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする子」の育成をめざして、日々の実践を積み重ねていく。そして、その中で見られた「具体的な子どもの表れ」を蓄積し、定期的に全職員で共有していく。

外国語教育において「積極的にコミュニケーションを図ろうとする子」とは具体的にどんな姿か、を明確にすることをめざす。

## 7 研究組織



## 8 研究計画

※日程・内容の変更あり。研究推進委員会は、必要に応じて行う。

月	日	曜	研究のめあて	形態	内容
4	10	月	研究の方向性・計画の確認	研推	研究の方向性の確認
	13	木		全体	研究の方向性の確認
5	19	金		全体	研究計画の提案・協議【概略】
	25	木		全体	研究計画の提案・協議【詳細】
6	1	木	授業研究による主題追求	全体	「実態」および「めざす子どもの具体的な表れ」の共有
	8	木		全体	外国語教育について共通理解（指導法、教材、年間指導計画等）
	22	木		全体	計画訪問について（指導案形式、実態調査等）
	29	木		全体	夏休みの予定、外国語の指導案形式
7	3	月	(救急法実技講習会)	(全体)	(救急法実技講習会)
	13	木	授業研究による主題追求	全体	第1回授業研究会（ <u>中</u> 3年） ※講師 理論研修（ <u>講師</u> 庄司 義広先生）
	19	水	(道徳についての研修)	(全体)	(道徳について共通理解)
	20	木	授業研究による主題追求	全体	外国語教育について共通理解、年間指導計画の修正
8	21	月		(全体)	(計画訪問 指導案 1次提出)
9	4	月		(全体)	(計画訪問 指導案 2次提出)
	14	木		全・部	2学期の研究計画の共通理解、授業検討会①
	25	月	(全体)	(計画訪問)	
10	5	木	授業研究による主題追求	部会	授業検討会②
	12	木		部会	授業検討会③、年間指導計画の修正
	19	木		全・部	各授業の共通理解、役割分担
	26	木		部会	授業準備
11	2	木	授業研究による主題追求	全体	第2回授業研究会（ <u>中</u> 4年・ <u>高</u> 6年）
	16	木		全体	第3回授業研究会（ <u>低</u> 2年・ <u>高</u> 5年） ※講師
	30	木		全体	第4回授業研究会（ <u>低</u> 1年）
12	14	木	研究のまとめと来年度の展望	全・個	年間指導計画の修正、授業研究のまとめ形式
1	11	木		個人	授業研究のまとめ
	18	木		部会	年間指導計画の修正、効果的な実践のまとめ、児童の変容
	25	木		全体	年間指導計画の修正、効果的な実践のまとめ、児童の変容
	2	15		木	全体